

言語と世界の関係について

黒澤雅恵

京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程

言語が世界を指示するという関係の基盤には、両者に対応という関係があるからとされており、かくして指示理論はその対応関係を前提とする。本発表はデイヴィドソンの議論を参照しながら、指示理論に新たな視座をもたらすよう試みる。

デイヴィドソン自身は指示に対して批判的であり、指示の概念だけでなく指示そのものも不要であると退ける。デイヴィドソンのこのような指示への見解は、彼が意味論としてタルスキ流の真理論を採用したことに関連する。一般に、文の真理はその構成要素の意味論的特徴に依存すると考えられており、したがって、文の真理を説明するにはその要素をはじめ、各要素の特徴や当該文の構成の特徴を明らかにすることが必要とされる。このとき、当該要素が固有名などや述語である場合、まさに指示がその特徴であると考えられている。かくして指示は不可欠であるとされる。一方、指示を非言語的な観点から分析されるプリミティブな概念とみなし、それに基づいて充足などほかの意味論上の概念をはじめとして真理を説明していくという方策は、デイヴィドソンによると問題がある。指示を担うのは上述のような語であるが、それらはある文のなかで何らかの役割をもつものなので、文から切り離されたそれらの語の特徴を指示と規定してさらに分析を加えるのは不可能だからである。このジレンマに対して、デイヴィドソンは〈真理論を説明する説明〉と〈真理論が行う説明〉とを区別して応じる。前者において、指示をはじめとする諸概念は理論的な構築物とされ、真理論の説明のための概念として指定される。真理論がうまく機能するために、指示の概念はやはり必要だからである。しかし後者は文の意味を、その文が生じる言語全体のなかに当該文を位置づけることで定めるという全体論的なアプローチを採り、語の役割はその文と話し手と対象の関係で定められるとする。

このように、デイヴィドソンは、語がそれと対応する対象を指示し、それが表れる文への真理に寄与するがゆえに基礎的であるという見解に表れている意味での「指示」に対して批判的である。かくして、このような視座に立つと、たとえばクリプキが因果説を提出するにいたる道筋で行った議論は批判的に捉え返されることになる。クリプキは「固定性 (rigidity)」を導入して固有名はどのような反事実的文においても同一の対象を指示している固定指示子であると主張し、記述に一致することは指示対象であることの必要条件でも十分条件でもない議論する。そして固有名だけでなく自然種名も固定性を有しており、科学的探求によって発見された「金は原子番号 79 である」というような文は、ア・ポステリオリな必然的真理であると主張する。このような議論は、以下の点が問題となるだろう。まず、記述は指示対象を同定するにあたって無力であるという点については、意味の全体論という観点から問題となる。意味の全体論に立つと、「アリストテレス」の指示対象は、「アリストテレスはプラトンの弟

子である」「アリストテレスはアレクサンドロス大王の先生である」など、ある発話者のなす「アリストテレス」の出てくるあらゆる文の関係から定められるからである。次に、科学的真理や科学理論への信頼についても検討される余地がある。デイヴィドソンによれば、たとえば物理学の場合、原子や分子などの微小構造を指定することによって巨視的な現象を説明する理論は考案され、巨視的なレベルでそれは検証されるという。つまり、他の理論の可能性があったうえで、最もよく検証されて予測能力をもっている理論を私たちは受け入れて用いているということになるからである。

以上の点では、デイヴィドソンは指示理論に対して消極的な視座をもたらしたと言えそうだが、一方、その議論には、指示を相手の発話の理解とみなすという積極的な側面も見出せる。デイヴィドソンが考案するのは自然言語Lの意味論であり、それは形式言語を考察対象としたタルスキ流の真理論に基づく。デイヴィドソンによると、真理が時と話し手に相対化されることでそれは自然言語に拡張され、Lの発話者の解釈論として機能する。解釈者はLのある話し手がある発話をなした状況に鑑み、それを証拠として、解釈者自身の観点から真と考えられる真理条件をその発話に与えることで話し手を解釈する。このようなデイヴィドソンの議論は、サールの記述説やドネランの確定記述の指示的用法の議論を読み替えて指示は相手の発話の理解であると読み直す場合に、親近性があるとみえる。

なお、このような解釈論を敷衍することは、クリプキが可能世界という枠組みを用いて自身の見解を主張したことを、対象——この場合は固有名とその指示対象についての私たちの直観的な理解——のふるまいを観察し、それを検証することによって理の適った一つの理論を構築するという、大きな意味での解釈という営みの一部と位置づけることにつながるだろう。

以上から次のように結論される。デイヴィドソンは指示に対して批判的であるため、その議論は一方では固定性への批判につながったが、他方で指示を相手の発話の理解と見なすことに寄与した。そればかりでなく、自らの信念群を対象——人ばかりではなく自然界に対しても——に投入してそれを理解するという営み全般を捉える観点を提示した、と。

ただし、そうであるならば、別の箇所ではデイヴィドソンが主張した「そのふるまいが私たちの文や意見を真あるいは偽にするなじみのある諸対象への直接の接触」という主張は再検討されなくてはならない。この論点は今後の課題である。